

序

——二〇二三年、『侍女の物語』のアクチュアリティを問う

加藤めぐみ

はじめに

二〇二二年五月二三日、ペンギン・ランダムハウスから「燃えない」素材でできた『侍女の物語』の特別版が、サザビーズのオークションにかけられ、一三万ドル（日本円で約一八〇〇万円）で落札された。その売上金は「言論の自由」「表現の自由」を守るための資金としてアメリカペンクラブに寄付されるという（Mutarech）。マーガレット・アトウッド自身がこの企画の主導者で、プロモーション映像に登場し、火炎放射器で自著を焼くパフォーマンスを見せている。『侍女の物語』で組上に載せられたアメリカが、起こりうる近未来のデイストピアではなく、ますますアクチュアリティを帯びてきているいま、この本がアメリカで禁書、焚書の対象となる日もそう遠くはないかもしれない。アトウッドによれば、『侍女の物語』はこれまでも独裁政権下の国で、また学校や図書館で発禁処分を受けたことがある

という。実際、アメリカペンクラブの調査では、二〇二二年、二六州、八六もの学区で、有色人種、LGBTQ+関連の一五八六冊の書籍が禁止にされたと報告されている (Penguin Random House)。そんな言論・思想統制への危機感を、彼女らしいユーモアである種の「笑い」に換えながら、仮にレイ・ブラッドベリの『華氏451度』のようにあらゆる書物が焚書の対象となる日が来ても生き延びてほしいと、『侍女の物語』の「燃えない」版を売り込むアトウッド。この華氏二二〇〇度の炎にも耐えうる『侍女の物語』は、アトウッドの言葉がどんな圧力にも屈しない力強さを持っていることの換喩メトファーとなっているのである。

フェミニスト・ディストピアの古典としての『侍女の物語』

『侍女の物語』の「政治性」が危険視されるようになったのは、ごく最近のことである。アトウッドは『侍女の物語』を、オーウェルの描いた近未来のディストピア世界の舞台となる一九八四年に書きはじめた。一九八五年の発売当初はディストピア小説と呼ばれることもなく、同時代の政治批判というよりも近未来の全体主義国家の恐怖政治を描いたSFファンタジー (スペキュレイティブ・フィクション) として反響を呼び、カナダ総督文学賞、アーサー・C・クラーク賞を受賞するなどの高い評価を受けた。その後、第二波フェミニズムのバックラッシュとキリスト教原理主義が力を持ちはじめたレーガン政権下のアメリカの状況に対する危機感を描いたものであることが徐々に明らかになっていくが、「現実世界の批判の書」、『一九八四年』の女性版、フェミニスト・ディストピアの「古典」として一気に読者の心を捉えるようになったのは、二〇一七年、排外主義やナショナリズム、女性蔑視を露あらわに

したドナルド・トランプ政権が誕生して以降のことである。オーウェルの『一九八四年』とともに、全体主義国家の支配体制に抗う^{あらが}極めて「政治的」なディストピア小説として注目を集め、さらに同年はじまったMGMとHEEの共同制作テレビドラマシリーズ『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』の影響力も大きく、出版から三〇年あまりのときを経て、ベストセラーとなった。

ドラマに登場する赤いマントに白いフードの〈侍女〉のコスチュームは、フェミニスト・プロテスト文化のなかで家父長制における女性嫌悪^{ミソジニ}、女性蔑視に対する「抵抗」を象徴するアイコンとなり、アクティビストたちはこぞって〈侍女〉のユニフォーム姿で街に繰り出し、反トランプを掲げるウィメンズ・ムーブメントや#MeToo運動、反中絶廃止運動などで抗議行動を行なった。この『侍女の物語』ブームの盛り上がりのお蔭で、ポピュラーカルチャーのなかで、フェミニズム自体が商業的にも政治的にもすつかり「フランチャイズ化」されたととも言われている(Dam)。そしてアトウッドの原作も、作者の手を離れて四〇以上の言語に翻訳され、ドラマ、映画、グラフィック・ノベル、オペラ、バレエなどの翻案作品として、つぎつぎと増殖し、流通、消費されている。さらに近年、ノートやエコバッグ、Tシャツ、マグカップ、マスクなどの関連グッズのラインアップも充実して、『侍女の物語』／フェミニズム思想はいまや、ファッションの一部となりつつあるようだ。

このような状況をアトウッド自身、大いに楽しんでいるともいえる。だからこそ冒頭のよくなパフォーマンスマンスも辞さないし、テレビドラマシリーズにはコンサルティング・プロデューサーとして関わっている。「人類史上前例のないできごととは作中に登場させない」(『誓

願』(18672)という原作小説の基本方針を引き継いでいるという点以外、ストーリー展開や脚色はブルース・ミラーらの製作陣に委ねているというが、逆にアトウッドはドラマで描かれた『侍女の物語』の続きの物語から刺激を受け、アン・ダウトが演じるリディア小母をイメージしながら、続編の『誓願』を執筆したという。女性たちの連帯によるディストピアの終焉への青写真を描いてブッカー賞を受賞した『誓願』は、シーズン6で『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』が完結したのち、新シリーズとしてのドラマ化が予定されている(Hill-Paul)。

二〇二二年七月、「ロー対ウェイド判決」を覆した「侍女」の国」アメリカ

『誓願』の出版後、四年あまりの間に、パンデミック、気候変動による自然災害、戦争といった悪夢がつきつきと起こり、アトウッドがマッドアダム三部作で架空の世界での出来事として描いたはずの世界規模のウイルス感染症の拡大までもが現実のものとなってしまった。アトウッドが書く十数年後には実現するという彼女の「予知」能力がまたしても実証されたともいえるだろう(鴻巣、四五―四六)。しかしそれは「予言(prediction)」ではなく、いわば「反予言(anti-prediction)」だったと二〇一七年の時点でアトウッドは語っていた(Arwood, 2017)。未来はそもそも予測不能なので予言なんてできない。だから未来をどんなに詳細に描いても、きつとその通りになることなどあり得ないだろう、と。しかし彼女の予想はいずれも外れた。一九八四年、『侍女の物語』の執筆当時、すでにアメリカ社会に存在していたキリスト教右派が着実に勢力を拡大し、かつてやりたいと言っていたことを実現で

きるような法案を続々と通過させてしまったからである。その結果、トランプ政権が誕生し、二〇二二年六月二十六日、アメリカで女性が中絶をする権利を認めた「ロー対ウェイド判決」が五〇年ぶりに覆ってしまった。直後のインスタグラムにアトウッドは「言った通りでしょ (I told you so)」と書かれたコーヒーカップを持った自身の写真を投稿した (Willingham)。「ノヴァスコシアにて、今日にびったりのカップでコーヒーを (Coffee in Nova Scotia with appropriately sloganed coffee cup...)」とのメッセージも添えられ、ここにもアトウッドのユーモアのセンスが光る。

二〇二二年夏、こうして『侍女の物語』はふたたび世界から注目を集めることとなる。民主主義国家であるはずのアメリカで、各州が中絶を違法とすることを最高裁が認める判決が下され、アメリカの女性たちはいわば〈侍女〉たちのように自分の身体を自分でコントロールする権利、すなわち、すべての人が望むタイミングで望む数だけの子をもつことを保証するSRHR (セクシャル／リプロダクティブ・ヘルス／ライツ) 性と生殖に関する健康と権利」という基本的人権の一つを剥奪されてしまったからだ。キリスト教原理主義と共和党政権との癒着の危険性をかねてから訴えてきた映画監督のマイケル・ムーアは五月初めに「ロー対ウェイド判決」が覆される見込みとの報道が流れた時点でアメリカを「侍女」の国 (Handmaid's Country)」と呼び、アトウッドが描いた強制出産が現実のものとなってしまうと嘆いた (Moore)。

『侍女の物語』をふたたびフィクションに (Make The Handmaid's Tale Fiction Again) ——トランプ政権スタート以降、連呼されてきたスローガンも虚しく、アメリカは確実に右傾化し、

歴史を逆行しているようだ。『侍女の物語』のなかで、オブフレッドは大統領が暗殺されて国会が機銃掃射され、軍隊が非常事態宣言をするという大異変が起こった時点で「彼らはそれをイスラム教の狂信者たちの仕業だと言っていた」(174三―一七)と回想する。そのクーデターを境に、女性たちは精神、身体、経済、政治、あらゆる分野における自由と権利を剥奪され、ギレアデ共和国の時代に突入する。九・一一の前にも後にも政治的な暴力行為といえはイスラム原理主義者たちが起こすものという偏見がアメリカ社会には広く浸透しているが、実はキリスト教原理主義者たちも一部は極めて過激で、信仰のためには武力を以って戦うことも厭わ^{いと}ない。アメリカのキリスト教系の新興宗教団体であるキリスト教福音宣教会のキャンペーン映像を題材に、アメリカの共和党政権の支持基盤となっているキリスト教福音派の活動を扱った二〇〇六年のドキュメンタリー映画『ジーザス・キャンプ』アメリカを動かすキリスト教原理主義』では、小学生の子どもたちが神様の軍隊で献身的な兵士になるようにとの洗脳教育を施され、音楽、説教を通じた熱狂的なトランス状態のなかで聖霊降臨を体験し、中絶の残忍さを学ぶ様子が描かれている。

トランプ大統領は政権交代直前のタイミングで、二〇二〇年秋にがんで亡くなったリベラル派のルース・ベイダー・ギンズバーグ判事の後任として、人工中絶に反対する保守派のエイミー・コーニー・バレット判事を最高裁判事に指名した。最高裁判事における保守対リベラルの構成を六対三で圧倒的に保守に傾けることで、司法を思い通りにコントロールするための布石であった。そのバレット判事が所属しているとされるキリスト教系カルト集団「崇拜の人々 (People of Praise)」は一九七〇年代にインディアナ州サウスベンドに設立さ

れた団体で、カトリックの儀礼に、異言や信仰療法といったプロテスタント・ペンテコステ派の儀礼を掛け合わせている。各メンバーには「長」と呼ばれる教育係が割り当てられ、精神的助言や指導を受けるが、過去には女性の長が「侍女」と呼ばれていた。それが一九八五年、『侍女の物語』の出版を機に改名されたという。アトウッド自身は「崇拜の人々」からの影響への言明は避けているが、同様に女性を「侍女」と呼ぶニュージャージーのカトリック団体「希望の人々 (People of Hope)」からインスピレーションを受けたことは認めている (Dickson)。

二〇二二年四月からネットフリックスで配信されている記録映画『我々の父親 (Our Father)』は、一九八〇年前後の十数年にわたり、不妊クリニックの患者たちに医師ドナルド・クラインが精子提供者であることを明かすことなく自分の精子をばら撒き、結果、近隣に同じDNAを持った兄弟姉妹が一〇〇人近くいることが判明したという一大スキャンダルを扱っている。クラインのその行為は、避妊を禁じ、キリスト教信者の子どもを増やすことによって、世界での影響力を高めようという宗教的カルトの「クイヴァーフル運動 (Quiverfull Movement)」の思想に根ざしているとされる (Felbin)。この運動は極めて白人中心主義的で、クラインも金髪、青い瞳のアーリア系白人を増やすことに執着していた。クイヴァーフルの家に生まれ育った女性の手記によれば、若い女性たちは「主の侍女 (the Lord's handmaiden)」と呼ばれ、その暮らしは『侍女の物語』の世界そのものだったという。その背後にはレーガン政権時代の最大のキリスト教原理主義団体、ジェリー・ファルエルが創始した「モラル・マジョリティ (Moral Majority)」があったとされる (Haetinger)。

二〇二三年、『侍女の物語』のアクチュアリティを問う

二〇二一年一月六日に起きた、ジョー・バイデンの大統領選での勝利という結果を受け入れないドナルド・トランプの支持者たちによるアメリカ合衆国議会議事堂の襲撃は、未遂に終わったものの、まさに「ヘヤコブの息子たち」によるクーデターを彷彿とさせる事件だった。二〇世紀後半、新自由主義的な成功モデルを掲げ、多様性とリベラルな国家づくりの模範を世界に示していたかのように思われた「帝国アメリカ」。その国が、長引く不況、広がり続ける経済格差、パンデミック、気候変動による自然災害、解消することのない人種、民族間の軋轢、そしてジェンダー、セクシュアリティにまつわる偏見と差別など、さまざまな課題に直面するなかで、今後、ギレアド共和国のような神権国家への一途を辿っていくことにならるのであるか。キリスト教原理主義者たちが目指す夢のユートピアは、リベラルな立場から見るとディストピアの悪夢と化す。アトウッドが一九八〇年代に憂えていたことがつぎつぎとリアルな現実になろうとしている二〇二三年のいまだからこそ、わたしたちは『侍女の物語』を再読し、そのアクチュアリティを問い、最悪の事態を回避するために声を上げていく必要があるのではないか。

そして予言者アトウッドは『侍女の物語』で描いたディストピアのその先の「未来への希望」も準備してくれている。それが続編『誓願』となる。『侍女の物語』と『誓願』の二部作は、ギレアド共和国というディストピアを経験し、乗り越えた女性たちの連帯によるサバイバルの物語であり、リディア小母、オブフレッド、その娘たち（アグネスとニコール）に

よるいわば女性の三代記でもある。そして、わたしたちはそれらをあわせて読むことによって壮大な物語とともにアトウッドが紡ぎ出す豊かなテクスチュアリティを味わい、体感することができる。本論集の冒頭のエッセイ『侍女の物語』はフェミニスト・ディストピアか?」でアトウッド自身が問うているように、『侍女の物語』を単なるフェミニスト・ディストピアの一例に還元し、矮小化してしまうことはできない。二〇二三年におけるアクチユアリティとともに、精読を通してアトウッドの二作品『侍女の物語』と『誓願』が喚起する「読みの可能性の広がり」を探り、それらのテクストの豊潤さ、深みを検証していくこと。それこそが本論集のミッションであり、目指すところである。

本書の構成

本書は一〇篇の論考（一篇の翻訳を含む）と二篇の付論、二篇のコラムから構成される。独裁者小説、ダーウィニズム、記憶研究、ユートピア／ディストピア小説、ケア論、声と語り、身体論、レズビアン小説、クイア・スタディーズ、フェミニストSF、アダプテーション——それぞれが専門を生かし、アトウッドの二部作を読み解いた論文集、いわば二〇二三年における『侍女の物語』論集の「決定版」をお届けする。

まずは冒頭に一九九八年一月にフランスで行われたマーガレット・アトウッドの講演『侍女の物語』はフェミニスト・ディストピアか? (“The Handmaid’s Tale: A Feminist Dystopia?”)の邦訳を掲載し、本書全体のイントロダクションとする。ここでアトウッドは「フェミニスト」「ディストピア／ユートピア」の定義を試み、広範なユートピア／ディスト

ピアの具体例を挙げながら、そのなかに『侍女の物語』を位置づける。ただしこの講演からすでに四半世紀のときが過ぎているため、その後の動向などが中村解題で詳述される。

そのうえで、全体を「Ⅰ ギレアデ共和国のリアル」と「Ⅱ 女性の身体／連帯」の二部構成とし、テーマごとにテキストの精緻な読解を提示する。逆説的ながら、アトウッドの『侍女の物語』『誓願』はその「政治的」な内容、アダプテーションばかりが注目されることで、文学テキストとしての綿密な読解がじゅうぶんになされてきたとは言いがたい。そこで「ギレアデ共和国のリアル」とした第一部では、自分の作品に描いた出来事のなかに「実際の歴史上で起こらなかったことは一つもない」というアトウッドのテキストのリアルさを「独裁者」「生政治」「記憶・歴史」「エコロジー」といった観点から裏書きしつつ、テキスト精読への接続を試みる。そして第二部では「女性の身体／連帯」に着目し、「ケア・サイボーグ」「声・語り」「セクシュアリティ」「異性愛／レズビアニズム」「フェミニストSF」「母性／代理母」といった一定のテーマに沿いながら、物語の技法、修辞、イメージにも注目した丁寧な解釈を提示する。付論とコラムでは、二部作の理解を助ける地図、国内外のフェミニストSF、ディストピア作品、ドラマシリーズの見どころを紹介している。以下では九篇の論文と二篇の付論について概略を紹介する。

Ⅰ ギレアデ共和国のリアル

奥畑論文は、ギレアデ共和国という独裁者不在の独裁神権国家で、リディアが「女性独裁者」として権力の中枢に君臨していることに注目し、英語圏の独裁者小説の系譜との関わり、特にジョージ・オーウェル『一九八四年』の〈ビッグ・ブラザー〉との比較から、リデ

イアの特異性を「弱い独裁者」という言葉で定義する。その「弱さ」は、女性たちを管理する「ビッグ・シスター」としての立場とそれを打ち破ろうとする「女性たちの連帯」への共感との間で揺れ動く自己矛盾にあるとされるが、独裁者として「弱く」あることこそが、独裁制をその内部から自壊させるための戦略にもなる。独裁者の顔をした独裁制の破壊者リディアの支配のあり方を精緻に読み解いている。

安付論は、ギレアデ共和国の転覆を導いた侍女オブフレッド、その娘の異父姉妹アグネスとニコールの逃亡劇のルートを地図上に辿りながら、その支援者たちのネットワークが、麻薬や酒などの密売組織の活動拠点であるアメリカ・カナダの国境近くの緩衝地帯に広がっていること、さらにその組織が、かつて奴隷の逃亡を支援した「地下鉄道」をモデルに描かれていること、また最大の支援者であるリディア小母がその地帯で生まれ育ったことを明らかにしている。

加藤論文は、ギレアデ共和国の頭脳集団（ヤコブの息子たち）のメンバーにリンプキンという社会生物学者が含まれていること、さらに彼が「暗号」でギレアデ初期の歴史を記録していたことに着目する。女王バチのみが生殖能力を持ち、その他の雌バチは働きバチというミツバチ社会のようにギレアデ共和国を見立てて社会生物学者が影で支配していた可能性を探る。一九七五年の社会生物学論争でのウィルソン博士とリベラルな生物学者たちとの政治的な対立、昆虫学者の父とアトウッドの関わり、進化論、社会ダーウィニズム、優生学との比較のなかでギレアデ共和国の支配体制、バイオポリティクス 政治のあり方を検証する。

三村論文は、オブフレッド、リディア、アグネス、ニコールが、忘却の波や女性に対する

ギレアデの支配的・抑圧的な構造に抗って過去を振り返り、それを保持および伝達しようとする行為が示すもの、彼女たちの物語が縊り合わされて、カウンター・ナラティブを形成する様を、近年の記憶研究の動向を踏まえながら丁寧に検証する。記憶と語り、叙述の改変、ノスタルジアの意味を探るとともに、『誓願』の物語がリディアの像にはじまり、自身について語る言葉を持たなかったベッカを含めた彫像に終わっていることの意義についても問いつ直すことで、記憶の叙述が共有され、伝達される可能性が示される。

中村論文は、『侍女の物語』二部作とその間に発表されたデリストピア作品であるマッドアダム三部作（『オリクスとクレイク』、『洪水の年』、『マッドアダム』）の五作品を包括的に、ポストヒューマン、家畜化、エコ・ファシズムといった観点から論じる意欲的な試みである。科学技術による生態系の改変と不老不死の達成に向けた人類のアップグレード、そして人工のパンデミックによる人類の絶滅と、それを生き延びた者たちのコミュニティ建設といった、ポストヒューマン的なモチーフが風刺たつぷりに描かれた『オリクスとクレイク』、『洪水の年』、『マッドアダム』の三部作と『侍女の物語』二部作とのハイブリッド的な読解を通して、人新世における主体性の問題に切り込む。

II 女性の身体／連帯

小川論文は、アトウッドの描いたデリストピアを現実と地続きと考え、二部作に現実社会の変容を如実に表す物語が語られているということを「ケア労働者」たるハラウエイ的「サイボーグ」やルゥグインのファンタジー、想像力の視点から考察する。時代の趨勢とともに、女による孤高の闘いの物語から、女たちの連帯の物語へと移り変わっていく経緯が、「自

己」の外、すなわち「他者」に意識を向けていくケアの目覚めを象徴していること、アトウッドの物語の力こそが女性差別に無自覚な社会にその苦難を知らしめ、「他者」の役割を背負わされている女性たちに新しい未来を想像するための力の源泉になることを明らかにする。生駒論文は、アトウッドとシェリーの『フランケンシュタイン』の物語を、身体を蹂躪され差別された者による抵抗と告発、主権の奪回の物語として位置づけ、そこで描かれる分断・対立、および、それら乗り越えようとする密かな共闘の試みを読み解く。『フランケンシュタイン』の物語では創造物クリエチャーがたったひとりで孤独に抵抗したが、女性たちの語りで構成された『誓願』では、多くの人間の連帯と集力的努力によるギレアデ共和国の崩壊が描かれる。彼女たちの声が語られ、記録されることで、「メッセージ」として未来に届けられ、その成功の物語はデイズトピアを生きるわたしたちの希望となっているという。

渡部論文は、まず『侍女の物語』出版直後、オブフレッドを「地味すぎるヒロイン」とする批判があったことを挙げ、そのヒロインが生き延びることができた鍵は二つのロマンスであったと分析する。一つは映画版で中心的に扱われたニックとの異性愛ロマンス、いっぽうは侍女の世界で構築されたモイラ、オブグレン、そしてフレッドに仕えた侍女の前任者との女同士の関係で、それらをレズビアン・ロマンスと呼ぶ。そして『誓願』におけるアグネスに告げたベッカの一言「これまでに愛したのはあなただけ」に集約される女同士の絆がギレアデ消滅に繋がったと論じている。

小谷論文は、まず一九八〇年代ジャンルSF界がハイテクをめぐるサイバーパンク運動という新しいムーブメントに沸き立ち、フェミニストSFがやや下火になったかのように見え

た時代の趨勢のなかで、ジャンル外作家の作品として『侍女の物語』が登場した際、どう受け止められたか、その時代の先端を駆け抜けた自身の経験も交えながら詳述する。そのうえで二部作が、現代社会における宗教的コミュニティとその性差別的世界観の関係性を鋭く映し出す洞察に溢れたデイストピアSFであると同時に、デイストピアから離脱し、新世界が女性の手によってどのように創造されていくかを示唆するフェミニストSFになっているというそのジャンル越境性をあらためて評価している。

高村論文は、ドラマ版『ハンドメイド・テイル／侍女の物語』で描かれた三人の女性の母性と代理出産のあり方を問う。原作に忠実であることを目指していないシーズン2以降では、『侍女』の代理出産で母になろうとする司令官の〈妻〉セリーナは最後に懐妊し、同性愛者のモイラはギレアデ共和国成立以前に報酬を目当てに代理出産をする。そしてギレアデ成立前に授かったハンナ、侍女として出産したニコルを国家およびフレッド夫妻に奪われたジューンの母性愛が復讐心に変わる様子が丁寧に描かれる。本論文はドラマ版で「母」的なものが絶対視され、女性登場人物がア・プリオリに「母性」を持つ存在として描かれている点が視聴者に息苦しさをもたらしている点も忘れていない。ドラマ版が見たくなる鮮やかな代理母論である。

ヴューラー付論は、『侍女の物語』が、恐怖と絶望を物語化して恐ろしい悪夢として描きつつも、ユートピアの可能性を見出そうとしているのに対して、同時代の日本のフェミニストSFが、最初からデイストピア的色彩が強かった点に着目する。鈴木いづみ「女と女の世の中」、倉橋由美子『アマノン国往還記』における異性愛規範の両義的な再生産、笹野頼子

『水晶内制度』の主人公の性的指向に関する曖昧さは、フェミニズムの目標である家父長的ジェンダー規範の克服を達成せず、異性愛規範にとどまっているという。

このほかにコラムでは、論文で扱いきれなかった内容が補われる。中村コラムは性別二元論がいかにディストピア的かを示す『侍女の物語』関連の英米のフェミニスト・ディストピア小説——『鉤十字の夜』『パワー』『声の物語』ほか——が紹介される。各作品の批評的な論点が丁寧に示され、ブックガイド以上のフェミニスト・ディストピア論となっている。石倉コラムではドラマ版の各シーズンの注目ポイントが満載である。高村論文とあわせて読みたい。

* * *

パンデミック、ロシアのウクライナ侵攻、「ロー対ウエイド判決」転覆、元首相の暗殺、エリザベス女王の崩御、三〇数年ぶりの円安、物価上昇——二〇二〇年代に入って日本で、世界で思いもよらないことが起こり、それまで当たり前と思っていたものをわたしたちはつぎつぎに失っている。地球温暖化による異常気象、環境破壊がこのまま続けば、そう遠くない将来に地球さえ失いかねない。自分の力ではどうにもできない事態に無力感、虚無感に襲われることもしばしばであるが、本書の論考を読むと、どんなディストピア的な状況にあっても、新たな視点を持つてみれば、違った世界が見えてきて、生きていく勇気が湧いてくる——そんな気持ちになれるのではないだろうか。それはそれぞれの執筆者の筆力による部分

も大きいが、何よりもアトウッドのテクストの持つエネルギー、生命力によるものと感じている。基本的な人権を奪われ、虐げられ、いかなる屈辱的なディストピア的状况、極限状態に置かれても、アトウッドが描く女性たちは仲間たちと助け合い、必ず前を向いて、未来への希望を失わずに生き延びていくから。ときにはユーモアのセンスを忘れずに。

「奴らに虐げられるな (“Nolite te bastardes carborundorum”）」 (『侍女』292-518)

【引用文献】

- Atwood, Margaret. *The Handmaid's Tale*. 1985. Anchor Books, 1998. (『侍女の物語』斎藤英治訳、ハヤカワ ep. 文庫、二〇〇一年)
- . “Margaret Atwood on What ‘The Handmaid’s Tale’ Means in the Age of Trump.” *The New York Times*, 10 Mar. 2017.
- . *The Testaments*. Anchor Books, 2019. (『誓願』鴻巣友季子訳、ハヤカワ ep. 文庫、二〇二三年)
- Dam, Dany van, and Sara Polak. “Owning Gilead: Franchising feminism through Margaret Atwood’s *The Handmaid’s Tale* and *The Testaments*.” *European Journal of English Studies*, vol. 25, 2021, pp. 172-189.
- Dickson, EJ. “Who Are the People of Praise?” *Rolling Stones*, 29 September 2020. <https://www.rollingstone.com/culture/culture-news/amy-barnett-people-of-praise-1067587/>. 二〇二三年十一月十七日閲覧。
- Felbin, Sarah. “Everything to Know About the Christian Religious Movement Mentioned in ‘Our Father’.” *Women’s Health*, 13 May 2022. www.womenshealthmag.com/life/a39980043/what-is-quiverfull-our-father/. 二〇二二年九月二〇日閲覧。

- Haetinger. "1 Grew Up In A Fundamentalist Cult - 'The Handmaid's Tale' Was My Reality." *The Establishment*, 26 April 2017. <https://theestablishment.co/i-grew-up-in-a-fundamentalist-cult-the-handmaids-tale-was-my-reality-fae2f77263d9/index.html>. 110113年11月17日閲覧。
- Hill-Paul, Lucas. "The Handmaid's Tale cancelled: Hulu's Elisabeth Moss drama to end with season 6." *Express*, 10 Sept. 2022. www.express.co.uk/showbiz/tv-radio/1666885/The-Handmaids-Tale-cancelled-Elisabeth-Moss-season-6. 110113年9月15日閲覧。
- Moore, Michael. "A Handmaid's Country (feat. Cynthia Conti-Cook)." *Rumble with Michael Moore Podcast*. 9 May 2022.
- Mufarech, Antonia. "Margaret Atwood Tried - and Failed - to Burn a Copy of 'The Handmaid's Tale': Here's Why." *Smithsonian Magazine*, 9 Jun. 2022. www.smithsonianmag.com/smart-news/margaret-atwood-tried-and-failed-to-burn-copy-handmaids-tale-unburnable-fireproof-180980223/. 110113年9月10日閲覧。
- Penguin Random House. "Margaret Atwood & PRH Fight Censorship With an "Unburnable" Edition of THE HANDMAID'S TALE." 25 May 2022. global.penguinrandomhouse.com/announcements/margaret-atwood-prh-fight-censorship-with-an-unburnable-edition-of-the-handmaids-tale/. 110113年9月10日閲覧。
- Willingham, AJ. "Handmaid's Tale' author has a message about Roe v. Wade." *CNN*, 12 Jul. 2022. www.cnn.com/2022/07/12/entertainment/margaret-atwood-handmaids-tale-roe-wade-instagram-ccc/index.html. 110113年9月15日閲覧。
- 鴻巣友季子『文学は予言する』新潮選書、110113年。